偽使研究の現況と課題

韓文鍾

1. はじめに
2. 偽使の概念及び基準
3. 偽使発生の背景
①倭寇問題
②倭人統制策の整備
③日本の国内情勢に対する情報不足
④日本国王使に対する優遇
⑤日本国内情勢の不安
⑥日本の外交体制の矛盾
⑦対馬の自然環境および経済的貧困
4. 偽使の実態および主体
5. 今後の研究課題

1. はじめに

朝鮮前期は9世紀末以来断絶していた外交関係が約500年ぶりに再開され、韓日両国が交隣関係に立脚した使節の交流を通じ友好関係を維持していた時期であり、また、朝鮮後期の対日外交の根幹を形成した時期でもある。したがって、韓日間の外交関係において朝鮮前期は極めて重要な時期だといえる。にもかかわらず、朝鮮前期の韓日関係史に対する研究は日帝強占期はもちろん、最近も日本側が主導してきており、その結果、韓国の学会では日本の学界の主張が相当部分批判なしに受け入れられてもいる。一方、日本においては1980年代から、村井章介などを中心として民族国家の枠を超える経済地域を設定し、‘海域史’を唱えて、中世後期の倭寇の活動を再評価もしている[1]。

その反面、韓国内においては1990年以後、少壮研究者を中心に韓日関係史への関心が高まり、研究も活発になっているが、大部分が古代と近・現代を中心になされており、朝鮮前期の韓日関係史に対する研究は他の分野に比べ、相対的に低調なのが実情である[2]。特に朝鮮時代の韓日関係史の中で、僞使問題は研究が極めて低調な分野の中の一つである。その理由としては、

[1] 1980年代以後、日本の研究動向については、以下の論文によく整理されている。佐伯弘次「戦後日本における中世日朝関係史研究」『韓日関係史研究の回顧と展望』国学資料院、2002年。
[2] 韓文鍾「朝鮮前期間韓日関係研究の回顧と展望」同上『韓日関係史研究の回顧と展望』、国学資料院、2002年。

この問題が、当時には極めて敏感で、秘密裏に行われた事案であったため、明確な関連資料が多くない上、朝鮮、日本、琉球の資料を多方面にわたり収拾し、綿密に対照し、検討しなければならない等、他の分野に比べて研究が極めて難しく、複雑なためだと考える。だが、僞使は外交史上、きわめて珍しい事件であるだけでなく、当時の朝日両国関係の特殊な断面を見せてくれる代表的な事例であるため、それに関する研究は朝日外交の性格および特徴を理解する上で、必ずや必要な主題の一つだと考える。だが、韓国内において偽使についての研究は河宇鳳、孫承喆、閔德基、韓文鍾などにより部分的に行われているだけで、本格的な研究はほとんどないというのが実情である[3]。したがって、この報告においては、朝鮮時代の韓日間の外交関係にあらわれた‘僞使’について、韓国内の研究成果を簡略に整理して、研究の問題点および課題を提示したいと思う。

2. 僞使の概念および基準

朝鮮前期に朝鮮国王と幕府將軍との間には敵禮関係としての交隣外交、朝鮮国王と九州節度使の大内殿、対馬島主などの地方の豪族とは、羈縻關係としての交隣外交という多元的で重層的な外交関係に立脚し、使節の往来が活発に行なわれていた。特に日本国王使をはじめ、地方の豪族が派遣した使節は全部で4800回余りに達するほど多かった。このような日本からの使節の往来は両国の平和的な関係の形成、維持にきわめて重要な役割を担っていたものと考えられる。だが、日本の使節の中には、日本国王使または地方豪族の名をかたったり、図書、書契、文引などを偽造して渡航する‘僞使’も多く含まれていた。

この‘偽使’について、韓国内ではほとんど研究がなされていないため、偽使の概念や基準に関する整理が行なわれてこなかった。それに比べ、日本での研究は比較的活発に行なわれてきた。そのうち米谷均は、偽使を“第三者が何らかの通交名義をかたり、派遣する虚偽の使節”であると、伊藤幸司は“派遣主体または使人が通交名義をかたる使節”であると定義している[4]。また、伊藤幸司は①通交名義や書契の状態、②日本国王使や巨酋使の使節が外交僧ではなく俗人である場合、③宗成職以後通交し始めた深処倭、④一定期間通交が断絶していたが、宗成職以後

---

[3] 孫承喆「朝鮮前期対琉球交隣体制の構造と性格」『西厳趙恒来教授華甲記念　韓国史学論叢』、1992年。
河宇鳳「朝鮮前期の対琉球関係」『国史舘論叢』59号、国史編纂委員会、1994年。
閔德基「朝鮮朝前期の‘日本国王’観―敵禮の面から―」『前近代東アジアのなかの韓日関係』早稲田大学出版部、1994年。
韓文鍾「朝鮮前期日本国王使の対朝鮮通交」韓日関係史学会月例発表要旨、2002年。
韓文鍾「朝鮮前期日本の大蔵経求請と韓日間の文化交流」『韓日関係史研究』17号、韓日関係史学会、2002年。
李志善「朝鮮前期日本國王使研究」江原大学校修士論文、2002年。
上記の論文中、孫承喆と河宇鳳は　球國王使をかたった偽使、閔德基と韓文鍾、李志善は日本国王使をかたった偽使について簡略だが言及している。

[4] 米谷均「16世紀日朝関係における僞使派遣の構造と実態」『歴史学研究』697、1997年。
伊藤幸司「僞使の時代」村井科研福岡シンポジウム発表要旨、2002年。

通交を再開した深処倭、などを偽使である可能性が大きいとして、これらを偽使の判断基準として提示している。

だが、これらの偽使に対する概念と基準は若干の問題点を持っている。例を挙げれば、書契、図書、文引を所持していない使節と、受職人、受図書人、歳遣船定約者ではないものが渡航してきた場合には、それも偽使に入れるべきかの是非など、偽使の範囲と基準が未だ明確ではないと考える。また、「偽使」の‘使’は使臣、使節、使者等を意味するものであり、これには国家の公式的な外交使節または使臣という意味が含まれるものと考える。しかし、朝鮮時代前期に日本から朝鮮に渡航する者たちは、国家間の公式的な使節ではない通商交易を目的とする通交者または通交貿易者の性格を帯びていた[5]。したがって、偽の通交者または通交貿易者を偽使と呼ぶよりは、彼らの性格や渡航目的をそのまま反映する意味で「通交違反者」と呼ぶ方がはるかに妥当であると思われる。したがって、偽使をより正確に理解するには、まず、偽使の概念と基準に対する充分な検討が必要だと思う。

3. 僞使発生の背景

偽使が発生した背景は、朝鮮側における要因と日本側における要因とに大きく分けて考えることができる。すなわち、朝鮮側における要因としては、遠くは倭寇問題から始まり、倭人に対する統制策の整備、日本国王使に対する優遇、日本国内の情勢への情報不足などを挙げることができ、日本側における要因としては、日本の不安な国内情勢、外交体制の矛盾、対馬の自然環境および経済的貧困、そして交易を通じた貿易からの利益追求などを挙げることができる。したがって、このような点が全て複合的に関連して偽使が発生したため、それらに対する総合的な研究が必要だと考える。

① 倭寇問題

倭寇は13-16世紀にかけて中国または朝鮮の沿岸において活動した日本人の海賊集団を総称する言葉だ[6]。これら倭寇は、活動時期とその性格により前期倭寇と後期倭寇とに分けられる。前期倭寇は13世紀から15世紀にかけて活動した倭寇で、主に朝鮮半島と中国沿岸において活動し、貿易以外の面が強かった。後期倭寇は15世紀後半から16世紀末まで活動した倭寇で、主に中国および東南アジア沿岸において活動し、貿易的な要素が強く、‘武装商人’と称されもした。

---

[5] 中村栄孝と田中健夫は、朝鮮前期に日本から朝鮮に渡航した者を「通交者」、または「通交貿易者」と称した。「通交者」と「通交貿易者」は、国家の公式な外交使節ではなく、通商交易を目的として朝鮮に渡航した者を意味していると思われる。田中健夫『中世対外関係史』東京大学出版会、1975年、124-125頁、中村栄孝『日本と朝鮮』、至文堂、1966年。

[6] 中村栄孝『日鮮関係史の研究』上　吉川弘文館、1965年、51頁。

前期倭寇についての研究は既に明治20年代から中世海賊史研究の一環として、日本において研究され始めており、植民統治期にも多くの研究が行なわれている[7]。これに比べ、韓国内においては1957年、申基碩の研究以後、申奭鎬、李鉉淙、孫弘烈、羅鍾宇などの研究者により倭寇発生の背景、侵入の実態、倭寇対策についての研究が行なわれてきた[8]。ところで、倭寇研究において両国研究者の間で大きな違いを見せている部分は、倭寇の発生原因および倭寇の構成員に関する問題だと思う。まず、韓国研究者たちは倭寇の発生原因を高麗の国内的要因と日本の国内的要因とに分けてとらえているのだが、韓国内的要因として恭愍王の反元政策推進と改革政策の不徹底、また権門勢族の権勢と土地兼併による政治･経済･社会的混乱と倭寇に対する統制力の低下等を挙げており、日本側での要因としては南北朝の騒乱による社会的な不安定と中央統治権の緩み、そして国内商業の進展、武装商人、海賊の海外活動、辺境に住む人々の海上活動の自由等を挙げている。それに反し、日本の学界では倭寇を高麗の政治不安から発生したものと規定し、倭寇の横行と消滅をともに韓半島の内部事情に起因したものと主張することで、日本側の原因提供についての事実究明を迂回して回避しようという傾向が強くあらわれてきた[9]。このような日本側研究者たちの研究傾向に反駁できずにいる理由について、金普漢は日本内の政治状況の変化と日本史における倭寇の関連性に対し徹底した分析がなされていないことに起因していると見ている[10]。最近に至り、日本史の立場から倭寇の発生原因を分析し、南北朝内乱期の悪党勢力の活動と兵糧米の確保と見る見解と[11]、九州松浦地域の小武士たちの恣意的な海賊活動と見る見解が提起された[12]。また、倭寇の横行の原因についても九州探題の今川了俊独自の権力強化の下から離脱した「反探題勢力」の集団行動と把握することで[13]、九州の政治状況の変化との関連性を立証しようとしている。また、倭寇の消滅を九州松浦地域の在地勢力の自発的な規制と彼等の動向[14]、そして倭寇の活動萎縮による浦内の高密度化を共同漁業権の分化により解決しようとしたという見解を示す等[15]、日本史的解釈に努めている。

このように、最近の韓国内においては日本の政治的状況へアプローチし、倭寇の発生原因と横行の理由、そして消滅過程を説明する新たな研究があらわれてきている。そうして、倭寇の実

---

[7] 中世倭寇研究史に関しては田中健夫「中世海賊史研究の動向」(『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会、1959年)に明治時代、大正時代、昭和20年以前、昭和20年以後の4つの時期に分けて、研究動向と問題点を述べている。倭寇についての日本での研究目録は韓日関係史学会編『韓日関係史論著目録』玄音社、1993年を参照されたい。

[8] 前掲　韓文鍾「朝鮮前期韓日関係史の回顧と展望」国学資料院、2002年。

[9] 日本の学界では倭寇の発生および横行の原因に対し、森克己の武装商人団説と田中健夫・田村洋幸の高麗側の貿易制限と田制の弱体化が倭寇の発生原因になったという説と、青山公亮の元寇への復讐説、その他、対馬や壱岐など、九州地方の経済的貧困、または経済的成長が倭寇横行の原因になったという説等、様々な主張がある。

[10] 金普漢「一揆と倭寇」『日本歴史研究』10、日本歴史研究会、1999年。
金普漢「少弐冬資と倭寇の一考察」『日本歴史研究』13、同上、2001年。

[11] 李領「「庚寅年倭寇」と日本の国内情勢」『国史館論叢』92、2000年。

[12] 前掲　金普漢「一揆と倭寇」1999年。

[13] 前掲　金普漢「少弐冬資と倭寇の一考察」2001年。

[14] 前掲　李領「「庚寅年倭寇」と日本の国内情勢」92、2000年。

[15] 金普漢「海洋文化と倭寇の消滅」『文化史学』16、2001年。

態は反探題勢力、伝統的海賊集団、悪党人たちであり、発生原因も九州の政治状況と密接に結びつき、統制不可能なこれらの勢力の恣意的な活動に起因したものととらえている。

その一方、倭寇の構成員についての研究を見ると、李領は14世紀後半、高麗側の史料に登場する倭寇集団の主体が、高麗、朝鮮人または高麗、日本人との連合であったという日本の学会の諸説[16]を再検討した。彼は『高麗史』の倭寇関連史料を分析し、史料の信憑性を立証し、それを通じ田中健夫が主張する、倭寇＝高麗、朝鮮人連合論の虚構性を批判している。また、彼は田中健夫が倭寇＝高麗·朝鮮人説の唯一の根拠として示している李順蒙の上書内容は、高麗末に流民たちが仮倭として活動していたという噂を根拠に、流民に対する対策を強調したものに過ぎないと批判し、庚寅年(1350年)以後の倭寇勢力は、南北朝の内乱という特殊状況下で、対馬・壱岐を中心とした九州一帯と四国の悪党化した武士たちだったと主張している。すなわち、彼は庚寅年(1350年)以来、倭寇が横行することになった背景を、北條得宗政権期の社会的矛盾による悪党たちの紛争と、数十年間にわたって展開された南北朝の内乱により、南朝の征西z將軍府が九州と瀬戸内海地域の悪党を南朝側の軍事力として動員したことに求めている。当時、南朝に属していた足利冬直と小弐頼尚が九州争奪をめぐる攻防が激化するにつれ、小弐頼尚が兵糧米確保のため数世紀にわたって支配してきた対馬勢力を(守護代宗経茂)を利用し、大規模な高麗侵入を行なったものととらえている[17]。

また、李領は庚寅年(1350年)以後の倭寇の実態を究明するための基礎作業でありながらこれまで疎かにされてきた13世紀の倭寇に注目し、‘13世紀の倭寇’と‘庚寅年(1350年)以後から1392年までの倭寇とを比べ、麗蒙連合軍の日本侵攻以後、14世紀中葉まで倭寇の発生が極めて少数であった理由を日本の国内的情勢と結びつけて考察している。また、当時の対馬を支配していた小弐氏と宗氏間に倭寇の空白期にどのような関連があるのかも検討している。その結果、庚寅年以後の倭寇は13世紀の倭寇の延長線上にあることを指摘し、倭寇の空白期が形成され、継続した要因は、麗日間の軍事的緊張と得宗政権の海上警固策にもあるが、より根本的な要因は対馬を排他的に支配している小弐氏と宗氏が倭寇の発生、禁圧、横行に大きな影響を与えたものととらえ、倭寇史において対馬が占める比重を強調している[18]。

以上見てきたように、倭寇研究は1990年代以前には倭寇の発生背景、侵入実態、根拠地、倭寇に対する対策等に集中しており、それ以後は倭寇＝高麗、朝鮮人連合論に対する批判とともに倭寇の発生背景を日本の国内情勢と結びつけようとする研究があらわれてきた。その反面、日本においては最近の日韓関係史を東アジアという世界の中で国家と民族を再認識しようとする傾向が強くあらわれてきている。その中の一つが倭寇についての新たな理解である。田中健夫は高

---

[16] 田中健夫は大量の人員、船舶、馬の海上移動などを考慮し、倭寇は日本人だけの海賊集団ではなく、日本人と高麗・朝鮮人との連合集団の可能性が高く、特に高麗・朝鮮人側の連合構成員を禾尺(楊水尺)・才人・一般農民・済州島人だと主張している。特に、彼は倭寇=高麗・朝鮮人説の根拠として以下のような史料をあげている。“判中枢院事 李順蒙上書曰---臣聞 前朝之季 倭寇興行 民不聊生 然其間 倭人不過一二 而本國之民 假著倭服 成黨作亂 是亦鑑也”『世宗実録』巻114、28年10月 壬戌、田中健夫「倭寇と東アジア通商圏」『日本の社会史』1、岩波書店、1987年、147-151頁。

[17] 李領「高麗末期倭寇構成員に関する考察」『韓日間系史研究』5、韓日関係史研究会、1996年。

[18] 李領「‘倭寇の空白期’についての考察」『日本歴史研究』5、日本歴史研究会、1997年。

麗末期の大規模な倭寇は日本人と高麗人の連合であり、その構成員の大部分は高麗人だったとする見解を示している。高橋公明も高麗の海上勢力に目を向け同様な見解を見せている。すなわち、倭寇の中には海上勢力が多く関与しており、その海上勢力を済州島の海人と想定している[19]。村井章介は前の二人の倭寇論に賛成しながら国境を超えた‘還支那海域’という概念を示し、倭寇と中世日本が朝鮮と行なった交易を論じている。このような研究は国家と民族という枠から脱け出し、東アジア海域の住民交流に注目した地点から出発している。一方、韓国内の学会においては日本の新たな視点に対する研究史的意味についての検討が充分に行なわれてこなかった。

このように前期倭寇についての研究は比較的活発に行なわれてきたが、後期倭寇についての研究ほとんど行なわれていない。だが、後期倭寇は偽使の派遣と密接な関連があるので、それについての研究が行なわれるべきだと考える。また、偽使は倭寇への禁圧および倭人統制策の実施と密接な関連があるので、倭寇問題を偽使の発生背景と結びつけて研究する必要がある。

② 倭人統制策の整備

朝鮮前期の対日外交の核心は、倭寇の禁圧と通交倭人に対する統制だったといえる。また、朝鮮においては建国直後から海洋の防御を忠実に行なう一方、外交的努力と倭寇に対する懐柔策を実施した。このような朝鮮の倭寇対策により倭寇が通交者へと転換し、朝鮮に渡航するや、彼らに対する統制と取締りをせねばならなかった。このため、朝鮮では倭人たちが停泊する浦所を制限する一方、書契、図書、文引と歳遣船の定約など、いろいろと統制策を実施した。また、通交倭人たちが三浦に到着し、日本へと帰国するまでの過海糧、上京日数、留浦日限等の接待手続きと内容まで詳細に規定した。このような倭人統制策と接待規定についての制度史的な研究は多く行なわれてきた。特に、文引制度と癸亥約條、授職制と授図書制は対馬領主をはじめとする地方の豪族たちを、羈縻関係の外交体制の中に組み込むことに大きく寄与し、以後対日通交体制の根幹となったことが明らかになった[20]。ところが、倭人統制策を施行する過程で朝鮮との独自の通交権を確保するための手段として、図書や書契、文引等を偽造した偽使が現れ始めたのだ。

一方、朝鮮においては通交倭人に対する統制を朝鮮政府が直接行なわず、対馬島主を通じて間接的に統制する方式を取った。その代表的な制度が文引制度であり、それは朝鮮に渡航する全ての倭人は対馬領主が発行する文引を持つものについてのみ接待と交易を許すというものである。対馬島主は、朝鮮政府から与えられた文引発行権を偽使を派遣する手段として利用したわけである。このように対馬島主が偽使の派遣と直接・間接的に関連していたので、朝鮮としては偽使の判別が非常に難しかったものと思われる。結局、対馬島主を通じた間接統制方式と文引制度の矛盾が偽使派遣を可能とした背景となったのである。

---

[19] 高橋公明「中世東アジア海域における海人と交流―済州道を中心として」『耽羅文学』8、済州大学校耽羅文化研究所、1989年。この論文は「中世東アジア海域における海民と交流―濟州道を中心として」『名古屋大学文学部研究論文集史学』33、1987年)を韓国語に翻訳し収録したものである。

[20] 前掲 韓文鍾「朝鮮前期韓日関係史の回顧と展望」『韓日関係史の回顧と展望』、国学資料院、2002年。

その他にも、朝鮮では通交者に対する懐柔策の一環として、授職制と授図書制を施行した。ところで、三浦の乱以後、対馬島主は廃止されていた授職、授図書倭人の通交を復活させ、これらの通交権を本来の所有者へ返さず、対馬領主が通交権を独占し、本来の所有者名義の偽使を派遣することで、朝鮮との通交を独占していったのだ。

このように、倭人に対する統制策の実施は偽使派遣の背景となったにもかかわらず、制度史的な研究を重視するだけで、倭人統制策と偽使との関連性についての研究はほとんど行なわれてこなかった。

③　日本の国内情勢に対する情報不足

朝鮮においては対日使行を通じて日本の国内情勢に対する情報を収集した。ところで、1443年(世宗25年)の卞孝文の使行を最後に、幕府將軍が住む京都に到着する使節の派遣はなくなった。したがって、日本の国内事情に対する情報は主に対馬に派遣された使節を通じて入手するか、対馬島主または朝鮮に来た通交倭人を通じて入手するしかなかった。だが、対馬島主や通交倭人を通じて得た情報は直接見聞したものではなかったので、不正確なものが多かった。また、三浦の倭乱（三浦の乱）以後、日本との関係が徐々に衰退し、日本についての情報は、さらに不足するようになった。このような日本国内についての情報不足は、結局日本からの偽使派遣を可能とした主要原因になったと考える。また、このような日本の国内情勢に対する無関心と無知は結局、日本の侵略に前もって備えることができず、壬辰倭乱という大戦乱を迎えることとなる背景でもあった。

④　日本国王使に対する優遇

朝鮮では倭使を国王使、巨酋使、九州節度使.對馬領主特送、諸酋使および対馬島受職人など4等級に分けて等級別接待を行なった。そのうち日本国王使は、他の使節とは異なり通交に制限がないだけでなく、接待と交易など全ての面において優遇された。このような交易上の利益のため、対馬島主をはじめとする倭人たちが日本国王使をかたる偽使を派遣しようとしたものと考えられる。また、対馬領主は三浦の乱以後、縮小した対朝鮮通交を拡大するための手段の一つとして日本国王使をかたった偽使を派遣したのである。国王使に対する優遇は琉球国の場合にもそのまま適用されたため、琉球国王使をかたる偽使も現われたのである。

⑤　日本の国内情勢の不安

日本では約60年余りの間続いてきた南北朝の混乱期を、1392年に足利義満が統一し室町幕府と称した。だが、室町幕府の統治は朝鮮政府が幕府を朝鮮と対等な国家として認識せず、単なる地方豪族の一つとしてとらえるほど脆弱だった。その上、1467年に將軍襲職をめぐり起きた応仁の乱により11年間戦争が続き、その結果将軍の権威は地に落ちた。このような混乱した国内情勢

を利用し、畠山、左武衛、細川、山名、京極殿などの有力な守護大名の名義をかたった僞使(王城大臣使)が1470年以後急増したのだ[21]。

⑥　日本の外交体制の矛盾

中世の日本においては五山派の禅僧たちが外交文書を作成する等、室町幕府の外交活動を担当していた。ところで、これらの外交僧たちは、偽使の書契を作成する等、偽使の派遣と密接な関連を持っていた。その代表的なものが、1463年の日本国王使の副使として渡航した天竜寺の五山僧の仰之梵高である。彼は帰国後、対馬島主の宗貞国の要請で京都に帰らず対馬にとどまりながら文引と書契業務を担当し、偽造書契の作成にも深く関係していた[22]。これらの事実を通して見れば、日本国王使をかたった偽使は幕府将軍の黙認の下で、対馬島主と五山禅僧により派遣されたものと推測される。

⑦　対馬の自然環境および経済的貧困

対馬は地理的に朝鮮と日本の中間地域に位置している島で、面積の95％以上が農業を営むことができない山地であるため、不足する食料や生活必需品を外部から調達するしかなかった。ところが、距離的に見ると、対馬から九州の博多までよりは釜山の方がはるかに近い。このような自然的、地理的条件のため、対馬は古代から今日間に至るまで韓半島とは密接な関係をもって生活を維持してきている。特に対馬島征伐により倭寇問題が一段落してからは、朝鮮との通交貿易が対馬の生活を左右するほど絶対的なものであった。しかし、1510年の三浦の倭乱（三浦の乱）以後、両国間の外交関係が断絶と再開を繰返すようになると、対馬の対朝鮮通交は急激に萎縮していった。このような危機を打開するための方策として対馬においては国王使をかたる偽使を派遣したり、廃止されていた深処倭の通交権を復活させ、対馬島主が掌握して、これらの名義の偽使を派遣したのだった。その結果、1510年以降、深処倭と日本国王使をかたった偽使が急増したのだった。

4.　偽使の派遣実態および主体

偽使の派遣の実態についての研究は主に長節子、村井章介、高橋公明、米谷均、橋本雄、伊藤幸司などの研究者たちにより行なわれてきた。だが、これらの研究は、夷千島王遐叉や王城大臣使、日本国王使、深処倭の名義をかたった偽使など、特定の地域や階層に限られており、また、朝鮮に渡航した使節が偽使なのか、真使なのかを解明することに集中しているため、偽使派遣の実態を総合的に把握するのに限界がある。したがって、これらをより明確に究明するためには、まず『朝鮮王朝実録』、『海東諸国記』等の韓国内史料と『善隣国宝記』、『朝鮮送使国次之書契覚』などの日本側史料を徹底して比較分析し、朝鮮に渡航した日本使節についての時期別、地域別

[21] 橋本雄「中世日朝関係における王城大臣使の偽使問題」『史学雑誌』106編2号、1997年。
[22] 前掲　橋本雄「中世日朝関係における王城大臣使の偽使問題」『史学雑誌』106編2号、1997年。

整理が必須だと考えられる。それを基に日本使節の真偽の是非と偽使の時期別、地域別特徴、偽使の類型と形態などが把握できるし、偽使が両国間の外交関係において占める位置および意味なども究明することができるだろう。

一方、偽使の派遣は朝鮮と密接な関係を維持していた対馬領主の主導の下で、外交文書の作成を担当していた五山禅僧の協力を通じて行われていたといえる。また、対馬島主は大規模な交易を行なう商業資本がなかったため、大資本を所有する博多商人とともに偽使を派遣し、貿易の利益を最大限高めようとしたのだった[23]。それなのに、偽使派遣の組織性と不法性に対する言及は全くない。したがって偽使についての研究においては、偽使の派遣がどの勢力によってどれほど組織的、不法に行なわれていたのかを集中的に究明しなければならぬと考える。また、国家間の外交関係が相互信頼を基にして行なわれなければならぬという点を考慮するなら、これらの不法行為は結局、朝日間の外交体制を崩壊させる重大な事案であったと考える。にもかかわらず、両国間の外交関係が持続できた背景や理由についての研究が行なわれていないため、これらについての研究も必要である。

5. 今後の研究課題

以上で指摘した以外にも偽使問題と関連し、今後研究されねばならぬ課題について考察すれば以下の通りである。

一、朝鮮時代の韓日関係において、偽使は朝鮮から日本に派遣した場合には全く見られない反面、日本から朝鮮に派遣する場合にだけ見られる偽りの使臣または通交者たちである。これらの偽使は韓日間の外交関係において極めて特異な存在であるだけでなく、当時の両国関係の特殊性を示す代表的な事例であり、朝日関係に多くの影響を与えたものと考えられる。したがって、朝鮮時代の朝日外交の性格および特徴を理解するためには、朝日関係史における偽使の位置および役割、偽使が両国関係に及ぼした影響等についての研究が必ず必要だと考える。

二、大蔵経の求請は被擄、漂流民の送還とともに朝日間の外交関係を形成、維持するのに重要な役割を果たした。ところが、大蔵経を求請するために朝鮮に来た日本国王使や守護大名の使節の中に、偽使が多く含まれていたという事実は、大蔵経求請と偽使が密接に関連していることを示しているといえよう。したがって、偽使の派遣と大蔵経求請との関係および外交僧の役割についての研究も十分に行なわれるべきだと考える。

三、偽使の派遣をめぐる対馬島主と幕府将軍との関連がより一層明確に究明されねばならない。三浦の倭乱（三浦の乱）以後、日本国王使をかたった偽使が多く派遣されたのだが、それらの渡航時に対馬島主の文引を所持していた。そのような点から見れば、偽使と対馬島主とは密接な関連を持っていたことが分かる。だが、それら対馬の偽使派遣を幕府の将軍が知っていたのかについての具体的研究が見られない。したがって、それについての研究が要求されている。

---

[23] 前掲　米谷均「16世紀日朝関係における僞使派遣の構造と実態」『歴史学研究』697、1997年。

四、日本から偽使を派遣した目的について、韓日間の外交関係を通じてなされた交易の物品およびその数量に対する計量的な分析と、交易品が両国の産業および文物の発達に及ぼした影響等を通して、多角的な考察を行なう必要がある。

五、偽使として判明した、または偽使である可能性がある使節にたいし、朝鮮においてはどのように対応したのか、そして偽使に対しどのような認識を持っており、それらの認識が対日政策にどのような影響を与えたのかを考察する必要があると考える。

六、日本国王使をかたった偽使と琉球国王使をかたった偽使を比較分析し、それらの類似点と異なる点を考察しなければならない。それは朝鮮の東アジア外交関係を理解する上で助けになるものと考える。

七、新たな資料の発掘を通じて図書や書契の偽造の実態を具体的につかむ必要がある。例えば、偽造された図書や書契の材質おとび製作技法等の分析を通じて、それらがどの勢力によりどのように偽造されたのかを分析する必要がある。

以上の諸主題が多角的に研究されて始めて偽使の全体的な実態を把握することができ、さらに朝鮮時代の外交体制の構造と性格も理解できるものと期待される。

朝鮮前期韓日関係史研究論文目録(1945年-2003年)

＜著書＞

李鉉淙 1964 『朝鮮前期対日交渉史研究』韓国研究院
金柄夏 1969 『李朝前期対日貿易研究』韓国研究院
国防軍事研究所編 1993 『倭寇討伐史』国防軍事研究所
孫承喆 1994 『朝鮮時代韓日關係史研究』知性の泉
羅鍾宇 1996 『韓国中世対日交渉史研究』円光大学校出版部
韓日関係史学会編 1998 『韓日両国の相互認識』国学資料院
韓日関係史学会編 1998 『韓国と日本、歪曲とｺﾝﾌﾟﾚｯｸｽの歴史』白樺
韓日関係史学会編 2001 『朝鮮時代韓日漂流民研究』国学資料院

＜個別論文＞

李仁榮 1948 「壬辰倭乱前後の対外関係」『新天地』3-10
申基碩 1957 「高麗末期の対日関係―麗末倭寇に関する研究―」『社会科学』1、韓国社会科学研究会
申奭鎬 1959 「麗末鮮初の倭寇とその対策」『国史上の諸問題』3、国史編纂委員会
李鉉淙 1959 「李朝初期倭人接待考 倭人接待考」(上、中、下)『史学研究』3·4·5
李鉉淙 1959 「朝鮮初期向化倭人考」『歴史教育』4。氏のこの論文は若干修正され「帰化倭人」という題目で『朝鮮前期対日交渉史研究』(韓国研究院、1964年)に収録されている。
李鉉淙 1960 「朝鮮前期ソウルに来た倭野人について」『郷土ソウル』10、ソウル市史編纂委員会
李鉉淙 1960 「三浦倭乱原因考」『海圓黄義敦先生古稀記念史学論叢』
李鉉淙 1961 「三浦倭乱後の対倭交渉再開始末について」『歴史教育』5、
李鉉淙 1961 「朝鮮初期倭人收税考―三浦恒居倭人と釣魚倭人を中心として―」『史学研究』9
李鉉淙 1962 「ソウル中心朝鮮初期対倭貿易考」(上、中、下)『郷土ソウル』13-15号、ソウル市史編纂委員会。この論文は若干修正し李鉉淙『朝鮮前期対日交渉史研究』(韓国文化院、1964年)に「対倭貿易」という題目で収録されている。
李鉉淙 1962 「三浦倭乱後の倭人接待貿易について」『韓日文化』1-1、釜山大学校韓日文化研究所

李鉉淙 1964 「朝鮮前期の対倭使節派遣の種別と意義」『史学研究』17、韓国史学会
李鉉淙 1964 「対日文化・技術・医薬品交流」『朝鮮前期対日交渉史研究』韓国研究院
金龍基 1964 「李朝成宗代の倭物庫について」『論文集』4、釜山大学校
金昌 1965 「書評:朝鮮前期対日交渉史研究(李鉉淙著)」『東国史学』8、東国大学校史学科
金柄夏 1965-67「李朝前期における対日南海物産貿易」(上、中、下)『経済学研究』13・14・15、韓国経済学会、
閔丙河 1965 「李朝成宗時倭物庫について」『国際文化』3、成均館大学校国際文化研究所
姜尚雲 1966 「麗末鮮初韓日関係史論」『大韓国際法学論叢』11-1、大韓国際法学会
宋正炫 1966 「莞島と倭寇―李朝時代を中心として―」『湖南文化研究』4、全南大学校湖南文化研究所
李載昌 1966 「麗末鮮初の対日関係と高麗大藏経」『仏教学報』3、4、東国大学校仏教文化研究所、(李載昌『韓国佛教史の諸問題』ウリ出版社、1993年、所收)
金柄夏 1967 「李朝前期における日本国内生産物の輸入」『商経論叢』7、檀国大学校
李鉉淙 1967 「書評:中世対外関係史(田中健夫著)」『建大史学』5、建国大学校史学会
金柄夏 1968 「李朝前期の対日貿易性格」『亞細亞研究』11-4、高麗大アジア問題研究所
金柄夏 1969 「李朝前期の織物生産と対日輸出」『論文集』6、慶熙大学校
金柄夏 1969 「高麗大蔵経と対日輸出」『李朝前期対日貿易研究』韓国研究院
劉鳳榮 1970 「倭寇と十勝之地」『白山學報』8、白山学会
劉元東 1970 「書評:李朝前期の対日貿易研究(金柄夏著)『歴史学報』45、歴史学会
李鉉淙 1973 「倭人関係」『韓国史』9、国史編纂委員会
李銀圭 1974 「15世紀初の韓·日交渉史研究-対馬島征伐を中心として―」『湖西史学』3
李鉉淙 1974 「倭寇」『韓国史』8、国史編纂委員会
孫弘烈 1975 「高麗末期の倭寇」」『史学志』9、檀国大史学会
孫弘烈 1975 「麗末·鮮初被倭俘虜の刷還」『史叢』19、高麗大史学会
金泰俊 1976 「鶴峰 金誠一の日本日録」『明知語文学』8、明知大学校
安輝濬 1976 「鮮王朝初期の絵画と日本室町時代の水墨画」『韓国学報』3、一志社
呉京愛 1977 「麗末鮮初の倭寇發扈と対馬島征伐」『君子社會』4、首都女師大社会教育科
李鉉淙 1977 「高麗と日本との関係」『東洋學』7、檀国大東洋学研究所
李鉉淙 1977 「韓日関系で見た対外意識」『南溪曺佐鎬博士華甲記念論叢現代史学の諸問題』、一潮閣
李鉉淙 1977 「韓日関係の歴史的省察」『全北史学』1、全北史学会
孫弘烈 1978 「麗末·鮮初の對馬島征伐」『湖西史学』6、湖西史学会
羅鐘宇 1980 「高麗末期の麗日関係―倭寇を中心として―」『全北史学』4、全北大史学会
李鍾学 1980 「実戦における兵力動員問題」『韓国史論』7、国史編纂委員会
韓容根 1980 「高麗末倭寇についての小考」『慶熙史学』6・7・8、慶熙大史学会

李鉉淙 1981 「高麗·朝鮮時代韓日関係の展開」『日本学』1、東国大日本学研究所
趙英彬·鄭杜熙 1981「朝鮮初期支配層の日本観―申叔舟の『海東諸国紀』を中心として―」『人文論叢』9、全北大人文科学研究所
安炳周 1982 「退溪の日本観とその展開」『退溪学報』36、退溪学研究
宋正炫 1982 「乙酉倭変について―康津周辺を中心にして―」『湖南文化研究』12、全南大学校湖南文化研究所
李鉉淙 1982 「對倭貿易」『韓国史論』11、国史編纂委員会
張学根 1983 「朝鮮の対馬島征伐とその支配政策―対外政策を中心として―」『論文集』8、海軍士官学校
李鉉淙 1984 「朝鮮前期の日本関係」『東洋学』14、檀国大学校東洋学研究所
車勇杰 1984 「高麗末 倭寇防守策としての鎮戍と築城」『史学研究』38、韓国史学会
申基碩 1985 「朝鮮王朝初期の対日関係」 『学術院論文集』24人文社会科学編
申基碩 1985 「朝鮮朝前期の対日通交―三浦恒居倭人問題を中心として―」『玄岩申国柱博士華甲記念韓国学論叢』
安輝濬 1985 「日本に及んだ朝鮮初期絵画の影響」『季刊美術』36
孫承喆 1988 「朝鮮朝事大交隣政策の成立と、その性格」『溪村閔丙河教授停年記念史学論叢』
鄭光 1988 「訳科の倭学と倭学書」『韓国学報』50
車龍杰 1988 「高麗末朝鮮前期対倭関防史研究」忠南大学校博士論文
金柄夏 1989 「乙卯倭変考」『耽羅文化』8、済州大耽羅文化研究所
羅鐘宇 1989 「朝鮮前期韓日文化交流についての研究―高麗大蔵経の日本傳授を中心として―」『龍巖車文燮教授華甲記念論叢 朝鮮時代の諸問題』
韓文鍾 1989 「朝鮮初期李藝の対日交渉活動について」『全北史學』11·12、全北大史学会
羅鍾宇 1990 「朝鮮初期の対日本統制策に関する考察」『如山柳炳德博士華甲記念論叢韓国哲学宗教思想史』
河宇鳳 1990 「朝鮮初期対日使行員の日本認識」『国史館論叢』14、国史編纂委員会
羅鐘宇 1992 「朝鮮初期の対倭寇政策」『中斉張忠植博士華甲記念論叢歴史学扁』
丁仲煥 1992 「倭寇についての一考察―古代および高麗後期の倭寇を中心として―」『港都釜山』 9
池斗煥 1992 「世宗代対日政策と李藝の対日活動」『韓国文化研究』5、釜山大韓国文化研究所
韓文鍾 1992 「朝鮮前期の対馬島敬差官」『全北史学』15、全北大史学会
孫承喆 1993 「朝鮮時代交隣体制の分析とその問題点」『韓日関係史研究』1、韓日関係史研究会
孫承喆 1993 「朝鮮の事大交隣政策敵禮関係」『新実学の探求』開かれた本

李慶喜 1993 「高麗末倭寇の侵入と対倭政策の一断面」『釜山女大史学』10.11合併号、釜山女大史学会
鄭章植 1993 「宋希璟が見た中世日本」『日本学』12、東国大日本学研究所
羅鍾宇 1994 「朝鮮前期韓日関係の性格研究」『東洋学』24、檀国大東洋学研究所
羅鍾宇 1994 「紅巾賊と倭寇」『韓国史』20、国史編纂委員会
鄭暎錫 1994 「朝鮮前期湖南の倭変について」『伝統文化研究』3、朝鮮大伝統文化研究所
河宇鳳 1994 「朝鮮前期の対日関係」『講座韓日関係史』玄音社
盧啓鉉 1995 「朴葳、金士衡の対馬島征伐」『釜山師大論文集』30
閔德基 1995 「室町幕府の対明朝貢仲栽要請と朝鮮の対応」『日本歴史研究会』創刊号
孫承喆 1995 「朝鮮時代日本天皇観の類型的考察」『史学研究』50、韓国史学会
(同『近世朝鮮の韓日関係研究』国学資料院、1999年に収録)
崔永禧 1995 「倭乱前の情勢」『韓国史』29、国史編纂委員会
河宇鳳 1995 「日本との関係」『韓国史』22、国史編纂委員会
韓文鍾 1995 「朝鮮前期対馬島の通交と対日政策」『韓日関係史研究』3
金東哲 1996 「国際交易の発達と摩擦」『韓国史』28、国史編纂委員会
閔德基 1996 「寧波の乱と朝鮮、日本、明の関係」『重山鄭德基博士華甲記念韓国史学論叢』
朴相國 1996 「大蔵都監と高麗大蔵経版」『韓国史』21、国史編纂委員会
孫承喆 1996 「対馬島の朝日両属関係」『独島と対馬島』知性の泉
(同『近世朝鮮の韓日関係研究』国学資料院、1999年に収録)
孫承喆 1996 「朝鮮前期ソウルの東平館と倭人」『郷土ソウル』56、ソウル市史編纂委員会(孫承喆『近世朝鮮の韓日関係研究』国学資料院、1999年に収録)
李領 1996 「高麗末期倭寇構成員についての考察」『韓日関係史研究』5、韓日関係史研究会
李在範 1996 「三浦倭乱の歴史的性格についての再検討」『韓日関係史研究』6
李チャンフン1996 「対馬島と韓日外交関係」『政治外交史論叢』14、韓国政治外交史学会
李チェヨン 1996 「朝鮮前期対日使行文学にあらわれた日本認識」『韓国文学論叢』18、韓国文学会
張得振 1996 「高麗末倭寇侵略期‘民’の動向」『国史館論叢』71、国史編纂委員会
河宇鳳 1996 「韓国人の対馬島認識」『独島と対馬島』知性の泉
韓文鍾 1996 「朝鮮前期の受図書倭人」『韓日関係史研究』5、韓日関係史学会
韓文鐘 1996 「朝鮮前期対日外交政策研究―対馬島との関係を中心として―」全北大学校博士論文
金琪燮 1997 「14世紀倭寇の動向と高麗の対応」『韓国民族文化』9、釜山大韓国民族文化研究所
朴漢男 1997 「恭愍王代倭寇侵入と禹玄宝‘上恭愍王疏’」『軍事』34、国防軍軍事研究所
李 領 1997 「’倭寇の空白期’に関する考察」『日本歴史研究』5、日本歴史研究会

韓文鍾 1997 「朝鮮前期の倭寇対策と対馬島征伐」『全北史学』19・20、全北大学校史学会、
羅鍾宇 1998 「倭寇は日本の豪族たちが操った海賊集団だ」『韓国と日本、歪曲とｺﾝﾌﾟﾚｯｸｽの歴史』1、白樺
羅鍾宇 1998 「中世日本人の韓国認識」『韓日両国の相互認識』国学資料院
閔德基 1998 「朝鮮時代交隣の理念と国際社会の交隣」『民族文化』21、民族文化推進会、
李慶喜 1998 「高麗後期対日貿易史研究動向と課題」『白楊史学』15、新羅大学校
李正守 1998 「15.16世紀の対日貿易と経済変動」『釜山史学』22、釜山大学校史学会
張得振 1998 「倭寇は日本人か、韓国人か」『韓国と日本、歪曲とｺﾝﾌﾟﾚｯｸｽの歴史』2、白樺
張得振 1998 「倭寇を征伐した対馬島征伐」『韓国と日本、歪曲とｺﾝﾌﾟﾚｯｸｽの歴史』2、白樺
鄭于澤 1998 「日本にある高麗仏画と八万大蔵経」『韓国と日本、歪曲とｺﾝﾌﾟﾚｯｸｽの歴史』2、白樺
村井章介1998 「中世韓日両国人の相互認識」『韓日両国の相互認識』国学資料院
河宇鳳 1998 「韓日関係と相互認識」『韓日両国の相互認識』国学資料院
韓文鍾 1998 「対馬島は韓国領土か?」『韓国と日本、歪曲とｺﾝﾌﾟﾚｯｸｽの歴史』2、白樺
金普漢 1999 「一揆と倭寇」『日本歴史研究』10、日本歴史研究会
小幡倫裕1999 「鶴峯金誠一の日本使行に対する思想的考察―鶴峯の思想と華夷観の関連を中心として―」『韓日関係史研究』11、韓日関係史学会
柳在春 1999 「14～17世紀初韓日両国平地治所城発達に関する比較研究―城郭の治所、軍事機能の分離と統合を中心として―」『史学研究』57、韓国史学会
柳在春 1999 「世宗代崔浣事件と韓日関係推移」『韓日関係史研究』10、韓日関係史学会、
柳在春 1999 「韓日両国の山城についての比較研究―14～17世紀頃を中心にして―」『韓日関係史研究』11、韓日関係史学会
李 領 1999 「日本人が見た倭寇の正体―'庚寅以後の倭寇'と日本国内情勢を中心として―」『歴史批評』通巻46号、歴史問題研究所
閔德基 2000 「日本史上の'国王'称号―日本中・近世を中心として―」『韓日歴史関係史研究』13、韓日歴史関係史学会
李 領 2000 「庚寅年倭寇と日本の国内事情」『国史館論叢』92、国史編纂委員会
李 薫 2000 「朝鮮前期漂流.漂着に対する朝鮮の認識と漂流民送還」『朝鮮後期漂流民と韓日關係』国学資料院
韓文鍾 2000 「朝鮮前期対馬早田氏の対朝鮮通交」『韓日関係史研究』12、韓日関係史学会、
韓文鍾 2000 「朝鮮前期日本国王使の対朝鮮通交」韓日関係史学会月例発表要旨
金普漢 2001 「少弐冬資と倭寇の一考察」『日本歴史研究』13、日本歴史研究会
金普漢 2001 「海洋文化と倭寇の消滅」『文化史学』16
孫承喆 2001 「朝鮮前期、被擄・漂流民送還と東アジア国際秩序」『朝鮮時代韓日漂流民研究』国学資料院

李 薫　2001　「朝鮮前期朝・日間の漂流民送還と交隣」『朝鮮時代韓日漂流民研究』国学資料院
韓文鍾 2001　「朝鮮前期倭人統制策と韓日関係」『京畿史論』4.5、京畿大学校史学会
韓文鍾 2002　「朝鮮前期韓日関係研究の回顧と展望」『韓日関係史の回顧と展望』、国学資料院
李志善 2002　「朝鮮前期日本国王使研究」江原大学校修士論文
佐伯弘次2002　「戦後日本における中世日朝関係史研究」『韓日関係史の回顧と展望』、国学資料院
韓文鍾 2002　「朝鮮前期日本の大蔵教典求請と韓日間の文化交流」『韓日関係史研究』17、韓日関係史学会
金ﾃｷﾞﾙ 2003　「丙申年(1596年)通信使行に関する研究」『朝鮮時代の政治と制度』集文堂
孫承喆 2003　「朝鮮時代韓日関係史料の紹介」『韓日関係史研究』18、韓日関係史学会
河宇鳳 2003　「朝鮮前期対外関係にあらわれた自我認識と他者認識」『韓国史研究』123
韓文鍾 2003　「高麗末朝鮮朝の‘倭万戸’」『全北史学』26、全北史学会